

Ⅲ 病弱教育専門性グループにおける研究

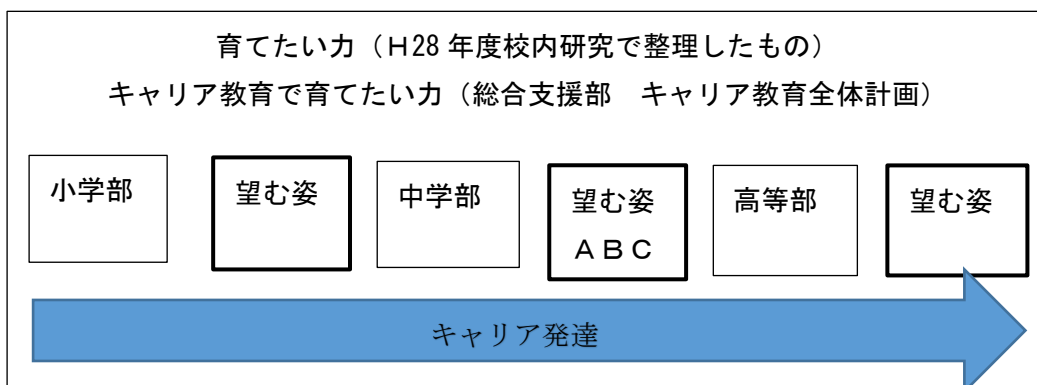
H29 年度研究

H29 年度	1 H29 年度の研究
研究主題	「病弱教育の専門性を高めるための実践に取り組み、指導・実践の集積を図る」
研究目的	H28 年度の校内研究での成果と課題、学校評価から、現状の本校教育活動における大きな課題は、病弱教育の専門性であると考え。昨年度の研究課題を解決し、本校病弱教育の専門性を高めることにより、「児童生徒一人一人の実態に即した指導・実践」につなげることができると考え、H29 年度の研究目的を設定した。
研究方法	(1) ワークショップ形式での共通理解 ・学校教育目標を基にした育てたい力 (H28 年度版) とキャリア教育で育てたい力 (総合支援部キャリア教育全体計画) を整理し、本校児童生徒の将来の姿についての共通理解を図る。 ・教科横断的な視点で、育てたい力をどの教科・領域等で指導するのかを整理し、育てたい力を確実に育てることができるように、また、小学部から高等部まで系統立てた教育活動ができるように共通理解を図る。 (2) グループに分かれ研究に取り組む (以下 G 研究と表記する) ・本校病弱教育の専門性を高めるとともに、指導・実践の集積を図る。 ・各グループでの研究の成果を全体共有し、病弱教育の専門性についての理解を深める。 (G 研究方法) ・各グループで病弱教育の専門性の向上を目指し、仮説・計画を立てた研究に取り組み、成果と課題をまとめる。 ・各グループで研究テーマを決定し、取り組む。 ・各グループで必要な場合は校外研修等を利用して情報を得るなどの方法を活用する。
研究の 取り組み	2 研究の取り組み (1) ワークショップ型研究 ア ワークショップ目的 ・学校教育目標を基にした育てたい力 (H28 年度版) とキャリア教育で育てたい力 (総合支援部キャリア全体計画) を整理しながら、本校児童生徒の将来の姿についての共通理解を図る。 【ワークショップ①】 ・教科横断的な視点で、育てたい力をどの教科・領域等で指導するのかを整理し、育てたい力を確実に育てることができるように、また、小学部～高等部まで系統立てた教育活動ができるように共通理解を図る。 【ワークショップ②】

現状の課題解決方法

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| ①病弱教育の専門性の理解 | → ワークショップ形式&G研究 |
| ②授業改善 | → G研究 |
| ③育てたい力とキャリア発達支援計画の整理や見直し | → G研究（研究部、総合支援部他） |
| ④育てたい力と各教科目標との関連性や教科横断的な視点 | → ワークショップ形式 |
| ⑤特別な配慮や留意事項の整理 | → G研究 |
| ⑥キャリア発達段階を小・中・高とつなげる | → ワークショップ形式 |
| ⑦病弱教育の専門性の向上 | → ワークショップ形式&G研究 |

ワークショップ① イ 各学部のキャリア発達段階を踏まえながら、各学部修了後の姿を作成する。
【ワークショップ①】



ワークショップ①では

育てたい力①②③とキャリア教育全体計画を見ながら、望む姿の作成をする

- （ア）「本校の病弱教育の専門性とは何か」について共通理解を図る （30 分）
- ・ 自分が考える病弱教育の専門性についてキーワードを付箋に書く（10 分）
 - ・ 模造紙に書いてカテゴリーわけして、キーワードを記入する（15 分）
 - ・ まとめ、全体共有（5 分）
- （イ）各グループで育てたい力①②③を参考に小・中・高の「望む姿」を作成する（50 分）
- ・ 将来の姿（20 代後半くらいまでの姿）、高等部卒業時の姿、中学部卒業時の姿、小学部卒業時の姿を思い描き、付箋に記入する（10 分～15 分）（各グループ）
 - ※書きやすい年代から書いて OK
 - ・ 付箋紙を模造紙に貼り、将来の姿から小学部卒業時までのカテゴリーにわけ、キーワードを記入する。（20 分）
 - ・ 各年代のカテゴリーとキーワードを整理する （10 分）
 - ・ 類型のグループ内で交流し共通理解を図る （10 分）

ワーク
シ
ョ
ッ
プ②

- (ウ) 各年代に貼った付箋紙を基にその力をどの教科で育てたいのかを考える。
各グループ次回のワークショップに見通しを持つ。

ウ ワークショップ内容～育てたい力①②③の表を基に、「何」をどの領域教科等で学ぶのかを検討する【ワークショップ②】

- (ア) ファシリテーター、グラフィッカーを決める
(イ) 付箋に記入 (10 分)

「夢を見つける」
国語、理科、総合

- (ウ) 貼る (5 分)

- (エ) 協議・調整 (10 分)

- ・育てたい力をどの教科・領域等で学ぶのか。横のつながり (小、中、高) はどのようにすれば良いのか。グループ内で協議し、表を完成させる。
- ・自立活動での内容を教科では指導できないのかも含めて協議を進める。

- (オ) まとめ (5 分) 資料参照 (A 類型)

(1) ～ (4) まで 1 サイクル 30 分 × 3 = 90 分



ワーク
シ
ョ
ッ
プ③

エ ワークショップ内容～本校の病弱教育の専門性とは何かを整理し、共通理解を図る。【ワークショップ③】

以下のまとめを基にして専門性のグループをつくり、G 研究を進めた。

専門性カテゴリー	身につけたい専門性
1. 学習・授業 関係	1. 各教科の指導力 2. 病気病状に合わせた指導 3. 有利さを活かした指導 4. 体験活動・経験の充実 5. 見学旅行、校外学習計画、実行 6. 学習指導要領の理解と学習内容の精選 7. 身体の状態に配慮した授業づくり 8. 本校児童生徒の実態に応じた道徳教育 9. 病状等を含めた心理的な課題を視野に入れた授業づくり 10. 学ぶ喜び、協働することの良さを感じさせる指導
2. 教材・教具	1. 個にあった教材・教具 2. 教材教具の開発・工夫 3. 身体的特徴・状況に応じた教材教具の工夫 4. ハンディキャップをカバーする道具

3. 学習方法・配慮	1. 体力を消耗しない学習方法 2. 病状を踏まえた学習展開・指導方法・配慮
4. 学習環境・支援機器	1. 学習環境の整備 2. ICTの活用 3. 個に合った支援方法の工夫 4. 補助的手段の知識 5. ユニバーサルデザイン
5. キャリア教育	1. 個に応じたキャリア発達の支援 2. 病気の進行も含めた進路指導（病気の進行、社会、本人、保護者の願い、本人の能力を含めた） 3. 将来像の理解
6. 保護者・病院との連携	1. 保護者、病院、関係機関の連携 2. 保護者のサポート 3. 病院・福祉・関係機関と連携した教育 4. 関係機関とつながる力 5. ICFの理解と活用
7. 病気理解	1. 病気・病状・予後の理解 2. 障がいの正しい理解 3. 身体の状態の変化に気づくことができる 4. 病状を含めた実態把握 5. 病気・病状への対応の方法を知っている 6. 体調管理の知識
8. 病気による特性の理解・QOL	1. 筋ジストロフィー特有の特性の理解 2. QOLを高める工夫 3. 人と関わる意欲、コミュニケーションの力を育む指導 4. 病棟生活、余暇活動を充実させるための指導
9. 心理的な配慮・心のケア	1. 喪失感や不安へのケア・サポート 2. 子どもの心に寄り添う（悩み、不安） 3. アンバランスな心理的な発達の理解（一部の自尊感情は高いが一部は低い） 4. 自己肯定感、自己有用感を高める指導 5. 児童生徒の心理面に配慮した指導

グループ研究

（２）専門性グループ研究（上記ワークショップを基に6グループを設定）

- 学習・授業関係（2グループ）
- 学習環境・支援機器
- キャリア教育
- 病気理解・病気による特性の理解
- 心理的な配慮・心のケア・QOL

ア 病弱教育の各専門性グループ【ワークショップ③】に分かれ、研究主題を設定し、研究に取り組む。

課題を絞るためにKJ法を使いグループの考えをまとめる。

（研究課題、テーマは、複数でも良いが、人数を加味し可能な範囲で決める）

イ 模造紙に研究課題、仮説、研究方法、役割分担、授業改善（従業研究）、研究推進日程、まとめを記入する。

- ・各グループで研究テーマを決定し、取り組む。
- ・各グループで必要に応じて授業研究を行う。
- ・各グループで必要な場合は校外研修等で情報を得るなどの方法を活用する。

グループ名& 名前		
研究主題 ○○	推進日程	
	8月	
研究仮説 ○○	9月	例) 内容の検討、教材作成
	10月	例) 指導案検討・各授業で検証
研究方法 ○○	11月	例) 研究授業・研究協議
	12月	例) グループ研究のまとめ作成
役割分担 ○○	1月～2月	例) グループ研究課題解決
	3月	グループ研究発表

G 研究
推進計画

(3) 校内研究推進計画

月	全校研究関係	校内研修・校外研修	授業研究関係
7	・ 研究日 3 (7 日) ワークショップ形式②※ワークショップ グループ終了 ・ 研究日 4 (14 日) G 研究スタート①	・ 水泳実技研修 (保) (5 日)	
8	・ 研究日 5 (18 日)	・ 水泳実技研修	
9	・ 研究日	・ 感染症対策	
10	・ 研究日 7 (13 日) ・ 研究日 8 (20 日) ・ 研究日 9 (27 日)		・ 公開授業、授業交流週間 (30 日～11/3 日) ・ 授業研究月間 10 月～12 月
11	・ 研究日 10 (10 日) ・ 研究日 11 (24 日)	・ ワークショップ型研修 (生徒指導)	
12	・ 研究日 12 (1 日) ・ 研究日 13 (15 日)		
1	※ G 研究まとめ	・ 研修報告会 (12 日)	
2	研究日設定なし※ G 研究まとめ		
3	・ 研究日 14 (9 日) 全体発表		

成果と
課題

(4) 成果と課題

ア ワークショップ型

成果

- ・児童生徒の小学部、中学部、高等部卒業時、青年期の姿を共有することにより、児童生徒のキャリア発達を意識した教育活動づくりにつながった。
- ・小学部、中学部、高等部の同じ類型の教員が集まり、育てたい力をどの教科で身に付けさせるのかを話し合い、まとめることができた。
- ・各学部のつながり、継続性の大切さを教員間で共有することができた。

課題

- ・育てたい力を教科と関連付けることが難しかった。
- ・育てたい力の共通理解と実践をつなげる枠組み、仕組みが必要だった。
- ・育てたい力を確実に育てるための実践をどのようにするのが難しかった。
- ・教科に関する知識がなければ、育てたい力と関連付けることが難しかった。

イ グループ研究

- ・本校病弱教育の専門性をカテゴリー分けし、希望に沿ったグループ設定をしたことにより、本校教員の研究に関する興味・関心の傾向がわかった。
- ・グループ研究を行ったことにより、学校内の課題が明らかになった。

学習授業関係研究グループ (A、B 類型 G、C 類型 G)

【A、B 類型 G】

成果

- ・個別の指導計画の再確認、教員間や関係機関と連携を図りながら多面的・多角的に児童生徒の実態を適切に把握することができた。
- ・育てたい力や各教科等でのねらいを明確にすることで、一人一人に応じた指導内容及び指導計画を構成でき、教材教具の改善を図ることができた。
- ・習得された「知識・技能」が「思考・判断・表現」する中で、「知識・技能」が更新される学習過程を実践することで、学習内容の深い理解につながる「深い学び」の実現に迫ることができた。

課題

- ・教科横断的な学びの充実を図るために、教科間のつながりを密にし、獲得した「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」を日常生活の中で活用できるように指導及び支援方法を追究していく必要がある。

【C 類型 G】

成果

- ・「学習到達度チェックリスト」を活用することにより、教師の思いや考えだけで授業を構成するのではなく、ねらいや指導の根拠となるものが明確になり、客観的な実態把握をするためのツールとして役立てることができた。
- ・チェックリスト等は指導を裏付けするためのものと押さえ、日常の観察からも実態把握を行い、授業の展開を工夫することができた。

課題

- ・ 重度重複の子どもたちの実態把握の方法について、学校としてのツールや枠組みがなく、個人の力量に委ねられている状況がある。
- ・ 目標達成に向けて子どもの主体性を引き出すためには、より丁寧で段階的な支援を工夫する必要がある。
- ・ 子どもの実態から授業を構成するだけでなく、学習指導要領の各教科等の目標を踏まえて、自立活動と教科の違いを区別して捉える必要がある。

学習環境・支援機器・ICT 研究グループ

成果

- ・ 様々な支援機器や補助具等について調べることで、活用法などの知識を深めることができた。
- ・ 支援機器や補助具についての情報交流から、様々な視点を持って考えることができ、視野の幅を広げることができた。

課題

- ・ 同じ支援機器を使用しても、児童生徒の体調の変化に応じて効果が左右されることがあり、児童生徒の体調の変化に応じて、機器を使い分ける必要がある。
- ・ 児童生徒の主体性を踏まえたとき、教師がどこまで関わればよいのか見極めが難しい。主動的な動きを引き出すためには、実態や状態を考えながら、教師の支援の程度を考えいく必要がある。
- ・ 支援機器・補助具を他の授業や活動にどうつなげていくか、今後どのように活用していくか、将来を見据えて考えることが大切である。

キャリア教育研究グループ

成果

- ・ キャリア教育に関わる現状を小学部、中学部、高等部で交流し、お互いの学習内容や目標についての捉え方の違いを確認し現状を把握することができた。
- ・ 小学部から高等部までの職員で実態の交流を行ったことで、育てたい力をより明確にすることにつなげることができた。
- ・ 育てたい力とキャリア発達の視点で見直し、小学部から高等部までの育てたい力を整理することができた。(A 類型のみ)
- ・ 中・高合同の研究授業では、中学部と高等部の目標のつながりを教師が意識することで、学習内容や方法を見直し授業を行ったことで、生徒に変容が見られ、一定の成果をあげることができた。

課題

- ・ 育てたい力を整理する際に、教員間でキャリア発達についてのイメージに違いがあり、グループ内での話し合いで意見が分かれることがあり、育てたい力の作成に時間がかかった。

- ・グループ内でキャリア教育や身に付けさせたい力の全ての項目についてイメージの共有を図ることは難しかった。キャリア教育についてのイメージの共有をどのように計るかが今後の課題といえる。

病気理解・病気による特性理解研究グループ

成果

- ・日常的に行っている合理的配慮について整理し、まとめることができた。
- ・個別の教育支援計画の長期目標を学年進行に伴う変容、自立活動と目標との関連についてまとめることができた。
- ・本校病弱教育においては、神経筋疾患児に対しては病気の進行に伴う機能低下を教員が常に意識し、支援機器等の代替手段を積極的に活用しながら、心理的な安定とコミュニケーション能力の向上を重視していることがわかった。
- ・重度心身障害児に対しては、現在保有している感覚を大切にし、児童生徒からの表出を引き出すような工夫や配慮をしていることがわかった。

課題

- ・認知特性に特徴があると思われる児童生徒が数名在籍しているが、日常観察による教師の見立てにより実態を把握しており、心理検査等で個人内差や得意なことや苦手なことを客観的に分析しているケースは少ない。
- ・神経筋疾患の児童生徒については、進行性の病気であることを教員がより強く意識する必要がある。
- ・児童生徒が病名や体調変化に気付いた時のフォローについては、カウンセリング的な対応を行う必要がある。
- ・児童生徒数が少ないため、対話的な学習を十分に行うことが難しく、コミュニケーションを苦手とする児童生徒が多いことから、学部をまたいだ授業交流を行う必要がある。

心理的な配慮・心のケア・QOL 研究グループ

成果

- ・それぞれの実践を整理し、QOL 向上につながる資質・能力として、「伝える力」「感情コントロール」「対人スキル」「生きがい、やりがい」と整理することができた。
- ・育てたい力に応じて、指導形態を工夫することが効果的だとわかった。
- ・成功体験の積み重ねを重視して指導や支援をしていることが実践から明らかになった。

課題

- ・獲得した力を生活に活かすために、学んだことが何につながるのか、何のために学んでいるのかを理解できるように指導していく意識をもつ必要がある。

- ・児童生徒が QOL 向上につながる資質・能力をどれだけ獲得できたかを測ることができていない。標準化された尺度を用いたり学習活動の前後でアンケートを実施したりするなどして根拠となるデータを集積し、指導方法や指導の場について検討する必要がある。
- ・教師が児童生徒の卒業後の姿・生活を十分把握する機会が少ない。児童生徒が暮らす環境について理解を深めたり、病院職員と連携を図ったりしながら、QOL 向上に必要な資質・能力をより深く、多角的に捉える必要がある。
- ・児童生徒の生活を支えている病院職員が教育に求めるもの、病院のニーズに応えられるような教育の在り方、学習内容についても考察し、連携していく必要がある。

3 まとめ

H29 年度の研究では、ワークショップ型、病弱教育専門性グループ研究の二本を軸におき取り組んだ。ワークショップ型研究では、育てたい力（H28 年度版）に各学部の卒業時・将来の姿を思い描きながら、各学部の段階で何を学ばせ、身に付けさせるのか、各類型でどのような力を、どの教科・領域等で学ばせるのかを整理し、共通理解することができた。また、本校の病弱教育の専門性とは何かを整理し、そのためにどのような専門性が必要かを理解することができた。

この一連の研究の取り組みにより、将来の姿を見据えて、授業でどのような力を育てたいのか、何のために学ばせているのかを意識できるようになり、一人一人の実態に応じた指導や実践につながったのではないかと考えている。